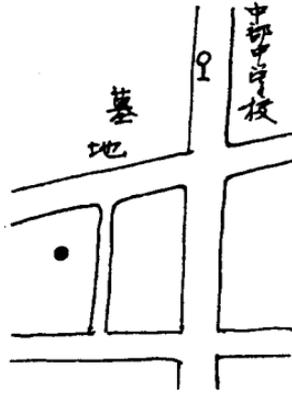


忘れられた

遺跡遺物の発掘(二)

一、酒豪矢田宗閑の墓

場所 南石垣墓地



矢田宗閑は中石垣

村の庄屋で、村人の
面倒をよくみ、とく

に敬神崇佛の念が篤

く神社仏閣を修復し

て村人から名庄屋と

言われていた。宗閑

は無類の酒好きで、生前から酒樽の墓石をつくらせていたそうである。

彼は、文政二年八月十三日に他界したが、高さ二米ほどの堂々とした墓石は、四斗樽に大盃をかぶせ樽の下に二個の盃を据えた奇抜なもので、ほとんど無傷で残って



いる。樽の正面に宗閑、裏に、

七十まで 朝夕のみし盃を 笠にかぶりて 死出の

旅かな

という時世の句が彫りこまれている。

文久四年に亡くなった息子宗智も、父の墓の側に同じ酒樽型の墓をたてている。

人様のお墓を好奇の目で眺めるのはどうかと思われるが、石造美術として価値と、敢えてこのようなお墓を作られたほどの故人であるから有恕くださるものと思う。

二、厩御前板碑

場所 実相寺山山頂

実相寺山の山頂の小高

い盛り土の上に建てられ

た巨大な板碑は、俗に厩

御前の塔といひ伝えらる

板碑で、別府市に現存す

る板碑では最大の石造美

術品である。



正面上部に葉研彫の種子しゅじバク（釈迦如来）があり、形

式は南北朝時代のもものと云われる。

かつて、実相寺山の東麓に、慶長五年に焼失したとい

われる旧実相寺があり、その境内とおぼしき所に今もあ

る南北朝形式の宝篋院塔ほうきやくいんとう（前号参照）や馬場（水車）の

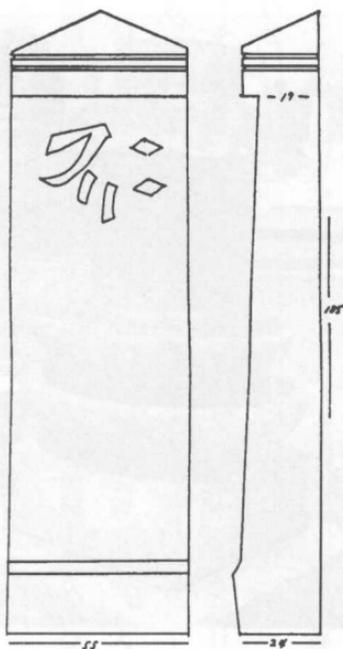
地に残っていた永享石幢せきじょう（一四三〇）と永正板碑（一五

一六）（別府市有形文化財・神和苑蔵）は、厩御前板碑

と同じく旧実相寺に関係深い遺物と考えられる。

この厩御前板碑は、弘化二年の『鶴見七湯廻つるみしちゆまわ記』に、

「（実相寺山）又山頂に石塔有りて梵字ぼんじほのかに見る



（作図 入江秀利）

のみ 月日杯も見えねばいかなるものとも詳に分り
 がたし 古老の口碑に傳たるは 帛御前の塔とのみ
 云 此名これある塔諸国杯も又あまた有とかや 俗
 に傳ふる處 建久の頃曾我兄弟の仇工藤を討たると
 き 大磯の帛と云う遊女曾我祐成が妾たりしが 貞
 操有しを哀みて其追福に建てたりともいへり 又或
 説には昔は寅待と云うをして 願望成就の後寅の塔
 とて建しもの有とも云り 今の世に庚申を待て猿田
 彦の塔を起るの類也もしとも云り……と書かれてい
 るし、同書の挿し絵にも山頂に板碑が描かれている。

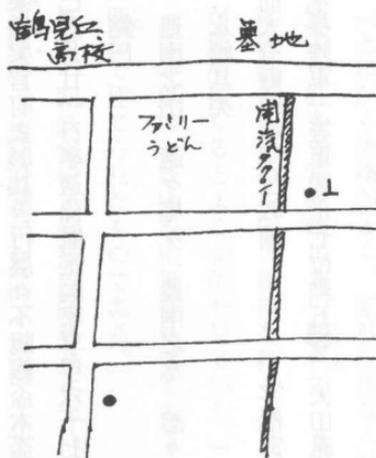


したいものである。

板碑の大きさやその風格からみて、南北朝時代のもの
 であることが
 確定するなら
 ば、永享、永
 正の石造建造
 物ともに市の
 文化財に指定
 して永く保存

三、「対岳楼」門と矢田梅洞の墓

場所 石垣西五一三一五



「対岳楼」
 は、咸宜園で
 学んだ矢田梅
 洞が、同窓の
 長南梁(梅外)
 を招いて開い
 た私塾である。

矢田梅洞(希一)は、文政十一年(一八二八)六月一
 日に生まれた。天保十四年咸宜園で淡窓に学び、嘉永三・
 四年遊学して蘭学を修めた。同五年兄孝治の医業を継い
 だが、文久三年「対岳楼」開塾にいたったのである。同
 塾では郷土の人材を数多く輩出した。

門は、かつて矢城谷に面して高い石垣の石段を登った
 ところにあった矢田家の正門であり、「対岳楼」への門
 でもあった。



石垣地区は、都市

計画の区画整理のため古い建物がほとんど姿を消した今、矢田家のこの門が古い時代の面影を残す数少ないものとなった。

「矢田梅洞君墓」

は中石垣墓地東の矢田家墓地にある。墓碑銘は現在では判読が困難であるので、

矢田孝雄氏の著書「矢田家のあゆみ」より転載した。

梅洞矢田君墓

勤按翁字希一

諱精號梅洞矢



田連之第三子天資穎敏強記弘化嘉永之交從廣瀨淡窓及旭

莊学咸宜園業大進最長詩文且善和歌遂任副都講後遊歷廣鳴熊本長崎修医術蘭学帰家施治名聲振四方文久癸亥招聘長三州之父梅外開私塾不幾翁代專監督教授來執贊者前後二百余名知名之士亦不尠明治庚午日田縣四郡教授役勤務丁丑會西南戰役全閉熟已卯當選大分縣會議員翌年東遊辛巳築邸以居之矣翁為人剛毅嚴正夙志王事誨子弟諄々適法講書流暢聽者不知倦好遇客談時事維新以來盡郡区村政竝教育医事勩業功業顯著德望益々高又資公益捐金穀築道路架橋梁官府表彰其善行屢々不賜銀盃木盃賞狀明治廿六癸巳五月廿一日卒適孫胤雄嗣家享年六十七以禮葬先塋之次

銘曰

豊南之山 邇々施々 豊南之水 溶々泚々 爰葬偉人 永姬其美

前大分縣師範学校教諭

宇都宮遠山 篆額題書

孝孫陸軍一等軍医正七位勲五等

矢田胤雄謹撰謹書

四、常盤崎加藤新六墓

場所 鉄輪いでゆ坂



塔身正面に常

盤崎加藤新六墓

左面に時津風内

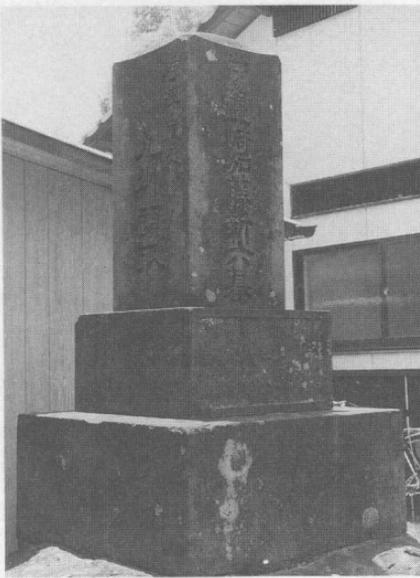
九州頭取、右面

に明治二十六年

三月穀旦・諸弟

子共立焉、台座に世話人三十三人、裏正面に豊岡村石工

村井茂一、基礎に四十一名の名が彫られています。



石塔の傍らに由来を示す次のような説明板がある。

「九州頭取とは、周辺数ヶ町村の相撲興行権をもった元

締めを表している。加藤新六は、ときわや旅館の二代目当主、大正十年（一九二一）八十三才で死去。

『とにかく体格がよく、豪放磊落な人だった。相撲が飯より好きで常盤崎はその醜名で、大相撲を招いたり、相撲好きを集めて田舎相撲を打ったり、引退した関取が湯治にくるとよく面倒を見ていた。』と古老は語る。

この墓はいわゆる納骨されたものではない。遺徳を偲んで建てられたものである。』

また、南鉄輪村と相撲の関わりについて、宝暦六年の古文書に、「両鉄輪・北石垣・平田・北中五か村の牛馬がよく通る南鉄輪村の廣渡では地獄の悪風（硫化水素）のために、多くの牛馬が死亡していた。そのために五か村評議のうえ廣渡に大將軍神宮を勧請して祀ったところ害がなくなった。それらしい毎年七月五日に五か村で祭りを行い、鶴見社の宮司を招いて祈祷し、願成就のために相撲を興行するようになった。」と書かれている。南鉄輪村で相撲が盛んになるのは、この大將軍宮の奉納相撲にかかわりがあるのではないかと思われる。

五、永福寺下の石像

風呂本 一 いでゆ坂



新装なった渋湯温泉の裏、永福寺下の石垣にみかけ石に彫り込まれた二体の像がある。二つの龕に一体づつ浅く彫られた僧形のまん丸い顔をした

素朴な像である。野積みの石垣に囲まれて、ともに袖の長い僧衣をまとして合掌しているのがよくわかる。二体は、佛であれば地藏であろうか。

おそらく、一遍上人が開祖といわれる時宗永福寺（旧松寿寺）であるから、上人に関わりのある遊行聖のお姿と考えるのが妥当であろうか。

石像とは関係ないが、貝原益軒の「豊国紀行」にこの界隈の記述があるのであげておこう。

「：熱湯の上にかまえたる風呂有 病者これに入りて乾

浴す 又其邊に川有 瀧有瀧の高さ二間半ばかり病人

是に打たれて浴す 其西の山際所々に地獄と称する所

多し 鬼山と称するは古き穴ありて下りみる 其穴の

底熱湯わく事其音恰も雷の響きの如し：」 (入江)